

兄かもわからない

榎本ユミ

男の子を生むはずだったと常夜灯の暗さが母を語らせている
輪郭はぼやけはじめて「あのときの子を産んでたらあなたはいない」
さざなみの寝息を立てる母はまだいまのわたしより若い女で
ふたりとも産んでくれたなら呼んだかもしれない兄よ 朝蜘蛛は跳ぶ
その日から巨大な兄があらわれて窓いっぱいには笑ったりする
てのひらの温め方がわからない「素直じゃない」と叱られるたび
どうしたってわたしの拳は丸っこい 割りたいガラスがたくさんあるのに
夜のように重い毛布でひとしきり泣いたら兄はすこし遠のく
わたしから湧き出るようにおぼろ雲 すき間だらけの大人になりぬ
この服はまだ着るからといってまでも母は抜け殻ばかり大事に
うまれない兄の遺品と呼べるのはそれを宿した身体しかなく
いつの日か廃墟になるのに母はすぐなんでも醤油でびしゃびしゃにして
夢でだけ母の裸体の豊かなり もう胃液しか出るものがない
愛されていたとは思う怖くない童話ばかりを読んで育った
狼になりたい山羊を傷つけず丸呑みできる大きさほどの
左手で右手の爪を切るときのテンポで家をでようと思う
コーヒーの甘さに気づいた日のような始まり 拳をみんなほどいて
ストールをきれいに羽織るビル風がそれを手伝う催花雨の朝
決めたのは自分だけと乗り込めば大きく傾ぐ小舟のような
phoneをスクロールすればあかるくて兄のことなど知らぬひとたち
ソーセージごと半分にできる手が好きだと告げてパンを受け取る
夢だっただれかが言ってくれないと船酔いをしたままのたましい
ほんとうは生まれてこないはずだったとパスタを茹でる背中において
大丈夫だからとあなたが言えば〈真実の口〉と称して指を甘噛む
妊娠ばそれは兄かもわからない鶏肉にフォークの穴だらけ
鍋肌に焦げるバターを見守ってふたり暮らしの期日は決めず
さびしさはすぐに大樹に育つからいつかあかるく振りかぶる斧
営巣の歓迎される燕いて雨は季節の花へこぼれる
車窓から途切れ途切れに日はさしてもっときちんとまぶしがりたい
空腹の春にだけ会う葬列のいちばん最後にいつもいる兄



発行者：榎本ユミ／2018年より作歌開始。2019年より塔短歌会。「たんたん拍子」「絶島」同人。

本フリーペーパーをお手にとってくださり、ありがとうございます。

塔短歌会の結社の賞のひとつである塔新人賞の候補作となりまして、「たくさんの人に読んでもらいたい」という選考委員の声に背中を押されて、フリーペーパーといたしました。感想など頂けると大変うれしいです。